

すき（好き）

心がひきつけられること。気持ちにぴったり合うさま。「—な音楽」「明るい色が—だ」「—になる。反嫌い

出典『大辞林 第三版』

好きを

抱きしめる

「好きなこと」を「好き」でいる気持ちは何歳になっても変わらないう。常に新しい自分に出会って、知らないうちに自分の一部になっていく。「好きなこと」を仕事にして成功したあの人や「好きなこと」を原動力に毎日働いている人もいる。「好きなモノは好き」と言える気持で世界は回っていると言っても過言ではない。そんなことを考えながら今日もわたしは「好き」を抱きしめる。

好き、好き！

すき、好き、

「あなたの好きなことはなんですか」という質問をよく耳にする。そもそも、どのくらい好きだったら「好きなこと」なんだろう。共通の趣味を持っている人同士でもその温度は人それぞれではないだろうか。ここでは企画員が独断で「好き」の度合いについてまとめてみた。

暇つぶし / リフレッシュ

課題をやらなくてはいけないう時、ついついゲームをしたくなるのはなぜだろう。その時点ではゲームをすることはいわば「好き」なのに趣味とも言い切れない。しかしすでに日常の一部に入り込んでいるあの存在……。その瞬間は熱中しているが他に好きなものがあり、サブ的な存在となっていることが多い。

波がある

好きなものは変わらないが、それにハマっている時期とそうでない時期の波がある。たとえば、好きな漫画の新刊が発売されるとその新刊を何度も読み返したり、ネットの考察サイトや感想を見まくったりする。でもしばらくすると冷めてしまう。でもまた新刊が出ると……という具合に波がある人も多いのではないだろうか。

つまみ食い

それが好きだと思ったら、今度はあれが好きなもの……？好きなことがコロコロ変わっちゃう人、周りにはいるよね。名付けるとすると「つまみ食い」かな。「つまみ食い」の人って、本当に冷めやすい。前に好きだったことは振り返りもしないけど、ストライクゾーンは広い。好きなことの「つまみ食い」はいいけれど、恋人の「つまみ食い」はやめようね。

生きがい

コイツはいろいろな意味でヤバい。「推しが足りない、死にそう」。そんな言葉を聞いたことがあるだろう。推し、つまり好きなものが自分の生きがいとなっている人は、それが供給されないと倦怠感に苦しみ、最悪死に至ってしまう。もちろんいいヤバさもある。推しの供給がされた途端に、発狂、動悸、精神の高揚がみられる。この麻薬並みのトリップこそ、好きなものが生きがいであることの醍醐味だ。

もちろん、この4つに分類されない人もいるはず。結局ここで言いたいことは、地球上に全く同じ人間が存在しないように「好き」の度合いも人それぞれ。自分なりに「好き」を見つけていったらいいと思うし、わたしもそうでありたい。

好きなことを×

シヤツフル

「好きなこと」ってみんな違う。ジャンルや好きの度合いまで「好きなこと」への向き合い方も人それぞれ。じゃあ、「好きなこと」をシヤツフルしたらどうなるんだろう……？ 今回は「好きなこと」が全く違う企画員2人で、お互いの「好きなこと」を体験しあった。ドラムと天体観測、普通であれば交わらないであろうジャンル。2人のシヤツフル体験記を、ご覧あれ。



ドラムって、バンドの中じゃ目立たない……。ギターとかベースとかの方がカッコいい……。そんなこと思っていない？ いやいやとんでもない。ドラムがバンドの中で一番かっこいいに決まっている！ ドンドンと安定感のある太いペダルの音、鋭く響くスネア、思わずノッてしまうハイハットの音、どこを取っても素晴らしいよね！ そんなドラムの魅力を、かつて私の師が教えてくれた。私も1人でも多くの人にドラムの魅力を伝えたい！ そんなわけで企画員Yに教えます。

ドラム

ドラムなんてリズムに合わせて叩けばいいんだろ？ リズム天国フルコンプした俺なら楽勝だぜ！ そんな心意気で練習開始。目標はBUMP OF CHICKENの『天体観測』の1番を完成させること。企画員Mに音の出し方を教わる。曲は一定のリズムでハイハットとバスドラムを叩きつつ、盛り上がる部分でタムタムやライドシンバルを叩く感じ。あれ？ 難しくね？ リズム天国とはレベルじゃね？ そんなこんなでなんとか一通り1番の叩き方を教わり、曲を流しながらやってみることに。曲が始まる。習った通りに叩こうとする俺。歌う藤原基央。分らなくなる俺。歌う藤原基央。頭が真っ白になる俺。歌う藤原基央……。結局ひどい有様になってしまったが、それでも初のドラム体験は楽しかった。特にサビ前の部分は練習の甲斐あってそれっぽく叩けるようになったのが嬉しい。ここで静寂を切り裂いて企画員Mが言った。「あ、ごめん。動画撮れてなかったわ」。



天体観測

忘れられない景色がある。11歳の誕生日に買ってもらった天体望遠鏡。レンズを通して観る世界はどれも綺麗だった。月のクレーター、木星の縞模様、光り輝く星々……。そこには宇宙の神秘、ロマンが広がっていた。宇宙少年だった当時の僕は瞬間にこの景色の虜になった。地球外生命体、宇宙探査、宇宙の始まり……。望遠鏡を覗いては宇宙のロマンに思いを馳せる日々が続いた。あれから何年経っただろう。今や僕も大学生だ。サークル、バイトに忙殺される毎日。そんな時にこの企画が決まった。幼き頃のあの日々を取り戻すため。そして無限に広がる宇宙の神秘を伝えるため。さあ、今こそあの夜空に望遠鏡を向けるんだ。



正直言って私は星に興味がない。よく家族で行くキャンプでは、私以外の家族は夜になると天体観測をしているが、私は一人残って火の当番。今更について行っても何の知識もない。そんな私がシヤツフルした趣味は……まさかの天体観測。12月の午前2時、望遠鏡を担いで私たちは手賀沼へと向かった。その日はあいにくの曇り。月はかろうじて見えていたが、星は何一つ見えていなかった。まずは、企画員Yの持ってきた天体望遠鏡をなんとか活用するため月を覗きこんだ。初めて間近で観る月の明るさに驚く。変わらない夜を照らし続けていた月がなんだか特別に感じられる。そう感じたのは私だけではなく、その感動を忘れないように私たちは交代で何度も望遠鏡を覗きこんだ。しかし、12月の夜は寒く、私たちの熱気もあつという間に冷めようとしていた。月の観測を終え、そろそろ帰る支度を始めようとしたその時、空を覆っていた雲が私たちの頭上だけぽかりと消え去っていった。見えないものを見ようとしていた私たちに奇跡が起こった。オリオン座に北斗七星、企画員Yの目が輝く。あつという間に時間は経ち、もう夜が明けようとしていた。こんなに夜空を観たのはこれが初めてで、あの時観た月がもう一度見たくて、今でも満月の夜には空を見上げてしまう。

好きなことを

× シヤツフル

ここに球界を代表する選手はいない。リーグ優勝も気づけば十年以上前。ドラフトで目玉選手を指名すれば、育成できないと馬鹿にされる。弱い。どうしようもなく弱い。でもそんなチームを好きな自分がいる。このチームはまさに俺たちの誇りだ。五年後でも十年後でもいい。いつの日かビールかけではしゃぐ選手たちを見て喜びたい。だから俺たちはこのチームと共に戦う。二十六番目の選手として。優勝の二文字を目指して。

好きなところは無限に挙げられるけど、そのどれもが決め手ではない。本当に「好き」って、そういうことなんだと思ってしまった。優しくなくても、謙虚でなくても、内に滾る情熱がギラギラしてなくても、笑顔が輝いていなくても、歌あなくても、素晴らしい曲を作らなくても、ギターを弾かなくても。たとえば、人でなくても大好きな自信があるんです。どうか、遠くから幸せを願わせてください。日々が楽しくありますように。

愛を語れ

「わたし」から「あなた」へ

お姫様が魔王にさらわれた？ 未来の世界が危ない？ 世界を救えるのはお前だけ？ まるで映画みたい。でも映画とは違って私は傍観者じゃない。私が動かないと冒険は始まらない。大草原を馬に乗って駆け抜けたり、大海原に乗りだしたり、一緒に冒険する仲間を見つけたりできない夢みたいな世界。普段は冴えない私でも、この世界では大冒険する勇者になれる。たとえば現実じゃないとしても、このワクワク感だけは絶対に本物なんだ。

私、実は
○○が好きです……

他の人に言える「好きなこと」とは違って、絶対にドン引きされてしまうような「好きなこと」。みんなはないような素振りをするけど、実はあるんでしょ？ 別にええじゃないか。ここでは、普段だったら言えない「好きなこと」を特別にシェアしちゃおう。例えばツイッターでのお話。「知り合いのツイートを限界まで遡る」「いいね欄をずっと見る」。これ意外にやってるんじゃない？ 気になっている人はもちろん、タイムラインに流れてきた人のアカウントは無意識に見ちゃう。メンヘラだと恋人のいいね欄を覗きさえあれば監視して、「なんで今ツイッターしているのに、私のLINEは返してくれないの!？」って発狂することもしばしば（実話に基づく）。インスタグラムでも友達の投稿にタグ付けされている人は、全然知り合いじゃなくてもなぜかタグを押していることもあるでしょ？ SNSでの個人情報収集は、今だと素人でもできるんだな。これ知ると怖くて気軽に投稿できないなあ……。よーし、裏垢で発散しようっと。

好きで生きる



大橋豪
株式会社 UNITED PRODUCTION 取締役・プロデューサー
大学卒業後、番組制作会社で四年間務めた後に独立。これまで携わった番組に『マツコの知らない世界』や『林修の今でしょ！講座』がある。

「好きなこと」はあるけど、それを生業にできる人はごく一部。でも本音は「好きなこと」を仕事にしたいと思う人も多いはず。小さい頃からテレビが好きでテレビプロデューサーとなった大橋豪さんに「好きなこと」に携わる楽しさ、そして大変さを伺った。

——現在のご職業である、番組制作に携わったきっかけを教えてください。

大学時代は、正直何も将来のことを考えてなかったんです。でも、好きなことを仕事にしたいなと思っていました。じゃあ好きなことってなんだろうって考えた時に、テレビ、映画、ラジオが好きだったから、そっち側の仕事がしたいと思って、就活の時に初めて考えたという感じですよ。

——テレビはいつ頃から好きだったのですか？

テレビは小さい頃からずっと見ていました。それがスタートというか……、今でも昔見ていたものは記憶に残っている。血肉になっているかは分からないけれど、それがベースになっていると思います。

——仕事を続けられているのは自分の好きなことに携われているからということが根底としてあるのですか？

そうですね。未だにテレビを見るのは好きだからだし、家に帰ったらどうしても自然とテレビをつける。そういう意味では好きだから続いている部分はあります。そうでないことやりは続かない。

——では、番組制作において理想と現実のギャップはありますか？

大きな天災や事件があった時など、バラエティで笑っている場合ではない時って本当にあるじゃないですか。そういうと

きに我々がやっている仕事は本当に人のためになっているのかと悩んだり、躊躇したりする部分はある。特に地震の時は痛感しました。報道や音楽の力は凄まじく、バラエティの無力さを感じましたがこんな話もあるんです。中途採用でADになった人に「なんでこの業界を選んだのか」と聞いてみると「悲しいことがあった時にテレビを見ていたら自然と笑えていたんです。だから私はバラエティを作りたいってこの世界にきました」と答えていた。その話を聞いた時にこのようなバラエティの作用もあるのかと思いました。

バラエティを見ている場合ではないという瞬間もあると思う。だけど、（バラエティは）なくてはならないものだと思うようにしています。

——世間の流れと自分のテイスト・好みがあつたときにどのように調節していますか？

もちろん個人の感覚や好みもとても大事な部分だと思えますが、番組は大人数で作る。それで会議を重ねて一つの方向にまとめるとなると、なかなか自分の理想論だけでは番組は作れない。ディレクターも、自分の好きなように担当しているコーナーを作れるかというところで、バランスを取ることがとても大事。自分の感覚だけで番組を作ろうとせず、見てくれる人・出演してくれる人のことを考

えるなど、番組に関わってくれる人がハッピーになるよう、調整をかけていくことが大切だと思います。

——自分が好きなテレビを仕事にするなかで、テレビ自体が嫌いになったことはありませんか？

テレビ自体が嫌いになったことはないです。

——では、仕事が嫌いになったことはあるのですか？

「嫌い」というより「飽き」に近いのはあったかもしれない。番組制作も地道な作業が延々と続くこともあるので、AD時代は「仕事楽しくないな」なんて思ってしまったこともありました。

——その飽きは、好きなことを生業にしていることから生じる綻びということですか？

そうかもしれません。好きだからこそ辛くなってしまうこともあったんですよ。現在は立場的に一步引いて現場をバックアップするような仕事が多くなっているのですが、今となっては地道な作業の連続でも制作の最前線の仕事ってやはりいいなと思います。制作の最前線といえばディレクターやADだったりするので、辛くてもそこでは味わえない楽しさもあります。

——やはり百パーセント自分の好きなことをするのは厳しいですか？

ADもディレクターも、自分のやりたい番組を担当するとは限らないし、テレビが好きでテレビ業界に入ったものの、自分のやりたくない仕事や番組をやっている人はたくさんいると思います。綺麗な事かもしれませんが、どんな仕事も経験の蓄積になるので、無駄にはならないと個人的には思っています。例えば、「今の仕事、自分のやりたいことではないので辞めます」と相談してくるADもいます。が、そんな時は「今やっていることは決して無駄ではない。経験として二三年後、さらにディレクターになった時に役立つこともある」とアドバイスするようにしています。

こなす、ではない。好きな仕事をしていると、どうしても責任が伴ってくる。

——好きな仕事でも、地道な作業をこなす必要があるということですか？

こなす、ではない。好きな仕事をしていると、どうしても責任が伴ってくる。一人一人にかかる責任は大きい。番組制

作者は、責任をもって自分が担当する番組を作るプロ集団だと考えてもいい。見られる人がいるから、適当にやるわけにはいかないし、一生懸命しないとけない。それが責任につながっている。

——後悔をしたことはありますか？

テレビ業界に入ったことを後悔したことはないです。自分にはラッキーな部分があると思う。実力はないけど、良くしてもらっているなど。だけど、仕事では後悔の連続です。理想と現実の違いに戸惑い辞めていくスタッフは少なくないですが「もつと上手くモチベーションを上げてあげられれば」と日々後悔しています。

——大橋さんはどうしてこの仕事を続けてこられたのでしょうか？

ちょっと夢のない話をするけど、僕はい意味で理想が高くなかったのかもしれない。理想は高くあるべきだけど、決めつけすぎない方がいいと思います。もっと柔軟に考えた方が、自分の可能性を広げる時もある。

「好きこそものの上手なれ」

——最後に、ご自身の経験を通して好き

なことを仕事にしたい学生に何か言えることはありますか？

好きなことを仕事にするからにはやはり責任が伴うということを忘れないほしい。あとは、「好きこそものの上手なれ」ではないけど、好きだからこそできることや頑張れることもあると思います。好きなことじゃなくなった、あるいは他にやりたいことができたから辞めていく人もいます。好きである努力もある程度必要になってくる。自分の与えられた仕事だけではなく、さまざまな角度から仕事を捉えるようにしたいと思う。同じ仕事だけど、他のセクションから仕事を見つめ直して、さらにその仕事の魅力に気づくこともある。好きなことを仕事にして、息詰まる時もあると思います。だけど、一步引いて違う角度からその仕事を見つめることはプラスになるんじゃないでしょうか。僕もこの仕事を辞めようと思ったことがあったのですが、少し時間を置いてテレビの仕事を見直した時にやはりこんなおもしろい仕事はないと思ひ、戻ることができました。何事も引いて見直してみることは大事なような気がしました。

——ありがとうございました。